

(文化学園大大学院・生活環境学) OYANG SHIZHE, 佐藤真理子*

1. 目的

ヒトは、快適な衣生活を送るため、衣服に様々な機能を持たせ、日々の生活に密着した中で衣服の形を発展させてきたと考えられる。民族服には、古くから伝わる知恵と経験が詰まっている。本研究では、漢民族の伝統的服装である漢服に着目した。各時代の衣服形態を整理し、その変遷において、気候変動や生活様式の変化が、どのように反映されてきたか、衣服の機能性はいかに向上してきたかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

1) 復元品製作

戦国時代から唐代における衣服形態の変遷、気候変動、生活様式の変化から、4つの衣服形態

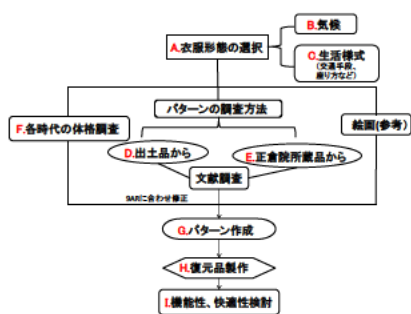


図1 本研究の流れ

を選択し、遺跡からの出土品や正倉院所蔵品を参考に、時代に伴う体格の変化に配慮したパターンを作成、復元品を製作した (図1)。

2) 着用実験

健康な若年女性10名 (年齢 24.5 ± 2.12 才, 身長 160.38 ± 2.34 cm, 体重 51.05 ± 4.45 Kg) を被験者とした。エアパック式接触圧センサー (AMI (株) 製) を用い、上半身と下半身の計26点の計測点における衣服圧を測定した。姿勢は立位, 前挙, 上挙, 側挙, 坐位, 蹲踞, 正座, 胡坐の6条件で、0.5秒毎に10秒間のデータを取得し、平均値を算出した。衣服と姿勢の2因子における二元分散分析をかけ、Bonferroniの多重比較を行った。

衣服圧と同時に、きつさ及び動きにくさについて官能評価を行った。結果に対しKruskal-Wallis検定をかけ、Scheffeの多重比較を行った。

3) clo値

4つの衣服形態における熱抵抗を重量から推測する次式より算出した。式 $I_{cl} = 0.57 \times \text{weight}$

3. 結果及び考察

薄手湯通しシーチング (綿100%) により、復元品を製作した (図2)。



図2 復元品着装写真例 (戦国時代 G1)

着用実験では、衣服圧測定結果から、G3 (唐代) が G1 (戦国時代) より椅子に座りやすく、G1 は G3 より床に座りやすいと示された。G1 着用の戦国時代は、生活様式として床に座り、車に乗ることが多く、足を大きく開く必要がないため、下衣に襠がなく、G3 着用の唐代は、椅子に座り、馬に乗り、足を大きく開けられる襠のある衣服形態であると示された。

clo値では、寒冷期の漢代の衣服G2の熱抵抗値が大きいと予測されたが、重量から算出した値でその傾向は示されず、サーマルマネキン等、着方の要素を含めたさらなる評価を要する。

漢服の衣服形態が、各時代の文化、生活様式を反映すると、様々な観点から明らかとなった。今後、温熱的快適性、運動機能性についての検討を加え、衣服の進化の過程を解明していきたい。